

---

# 微かに吹く風 ~ひとやすみ編

ひとやすみ

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

微かに吹く風 ～ひとやすみ編

### 【コード】

N7596A

### 【作者名】

ひとやすみ

### 【あらすじ】

緑深い田舎。小川と神社と彼女と……

(前書き)

同じ設定、登場人物で小説を描くテーマ小説の第5弾です！初参戦なので、大目に見てやってください。グループ小説で検索すると他の作者様の作品が読めます

スカートが透明な水に浸って濡れた。  
「ねえ、教えて」  
彼女が呟いた。

白いトラックが何度も農道を通り過ぎていく。  
明日は村の滝祭りだ。  
「教えてよ」

真子がつま先を浸している小川は滝に通じている。僕は、夏の日差しのせいで、眩しそうに彼女を見る。  
「教えてって、なにを」

真子は嫌らしく、にま、と笑った。  
「愛を」

「……どうしてウチに毎日来るのさ。夏休みなのに。」  
「だから、愛を教えてもらいに、だよ」

僕は無言のまま、ソーダのアイス棒を持っている彼女の手首を掴む。しばし見詰め合う。掴む指に力を入れると、アイスは小川に吸い込まれるみたいにぼちゃり、と沈んでいった。「ぎゃあ！」と真子が悲鳴を上げる。

「もー啓くん、なにすんだよ！」  
ソーダ色の氷菓は、崩れて透明な川に溶けていった。僕は、アイスの棒を拾い上げた。あたり、とあった。

「はい。弁償するよ」  
「弁償とかそういう問題じゃないでしょ！　ものは粗末にしちゃいけない。啓くんなんて嫌いだ」

少し日に焼けた頬を膨らませて怒る。  
僕と真子は高校3年生で最期の夏休みだ。僕に限っていえば、来年大学に受からなければ、学生最後の夏休みである。

「……真子さ、なんでウチに来るの？ 大学受験しないんだろ？」  
毎日毎日勉強する必要なんてないのだ、彼女は。それなのに、ウチに来ては数学のテキストを広げ、世界史Bの問題集を広げ、僕の勉強に茶々を入れてくる。

「へ？ だからあ、それは愛を教えてもらいにだって」

「ばっかじゃねえの」

鼻で笑って言い返してやると、真子は不意に真剣な表情になる。

丸い唇が開く。

「因数分解も、3次方程式も、啓蒙思想もいらない……私、啓くんが欲しい」

「……え」

「冗談だよ。ばっかじゃないの？」

「俺、帰るわ」

あ、待つて待つて、と立ち上がろうとした僕の腕を真子が掴む。

日光で茶に透けた髪と瞳でじっと見上げて言う。

「違うの、ふざけてるんじゃないかって、『愛ちゃん』のこと聞こうと思つて」

「へっ？」

「愛ちゃん。私たちがまだ小学生のときに、すごく髪が長くて綺麗なお姉さんだった。覚えてない？」

僕は突然投げられた質問に眉を寄せて、とりあえず真子の隣に座りなおした。

「よく遊んでもらったの。その、神社の前で」

首だけ背後を向き、古い神社に視線を向けている。

「ときどき思い出すんだ。たぶん、啓くんもいたはずだよ、そのとき」

僕が無言のまましていると、彼女は立ちあがって、そちらに向かつて歩いていった。

神社の周囲には高い木々が生い茂り、そこだけ別世界みたいに暗く涼しい。微かな風が吹いて、真子の結った黒髪の後れ毛を揺らし

ていった。

「……俺は、愛ちゃんなんて知らない」

「みんなそう言うの。覚えてるの、私だけなんだ。記憶では、啓くんも、弘樹も、太郎もみんな出てくるのに。最近夢までみるの」

「ふうん。よくわからないけど、夢と現実で、混同してるんじゃないか？」

「……私もそう思いたいんだけど」

でも、と真子はひとつ溜息をつく。久しぶりにみる彼女の思いつめた表情。

「ひとつ重要なことを思い出したの。神社の柱に皆の名前を彫ったこと。あの柱だよ……私、確かめるの怖くって」

「どうして？」

「だって、もしもそれがあつたら、」

そこまで言つて、真子は口を噤んだ。

僕は微笑むと、真子の手を繋いで、その彼女が指摘する柱に近づく。真子は躊躇っているようだった。

「ほんとだ。あるよ。」

「えっ」

「下手糞な落書き。啓と、太郎、と弘樹、と真子。ほら」

真子は恐る恐る僕の肩から柱を覗く。

「愛なんてない。どこにも」

「……あ、ほんとだ」

「どこにもない。」

「愛ちゃんはいない」

「だからさ、真子の記憶違いだって」

「そう、かな」

「そうだって」

「……そうだね」

そこまで呟くと、真子は、からからと笑い始めた。僕の腕を離れて、小川の方へ小走りしていく。

「よかった？」

僕は彼女に聞く。

「うん、よかった！ だって、その夢の最後って、みんなで彼女の背中を押して落としちゃうの。滝つぼにね。どぼん、て。殺しちゃうんだ、彼女を！」

大げさな身振りで話す真子。

よかった。

ほんとうに。

落書きに気が付いたのは、つい昨夜だった。僕は弘樹とそれをやすりで消した。彼女が痕跡に気が付かなくてほんとうに良かった。

「啓くん」

真子はスカートの裾を持ち上げて小川に足をいれている。

「ずっとじゃなくなっていていいから、街の大学に行くまででいいから、それまででいいから……ずっと一緒にいて？」

微かな風が吹いて、彼女の長い髪を揺らしていった。『彼女』とそっくりだと思う。

僕は微かに笑って答える。

「その『ずっと』って、街へ出たらずっとにならないの？」

だって、しょうがないだろ。

真子の記憶は本物なのだから。

10年前、僕らは『愛ちゃん』の背中を押した。

理由は呆れるほど子供らしく幼稚で愛らしく馬鹿らしくて、滝つぼに吸い込まれていった彼女の悲鳴以外、僕も忘れてしまったわけだけ。繊細すぎた真子はそれを忘れて、そしてときどき思い出す。その記憶を夢のまままでいさせて、真実にさせないこと。

それが僕の役目で罪だから。

「……一緒に行っていいの？」

「うん」

願うは故郷で最後の夏休み。

微かな風にさえ、吹かれて消えてしまいそうな気がして、儂げな彼女の腕を掴む。

「嬉しい……啓くん、ありがとう」

愛ちゃんは青く美しい滝の底で、静かに沈んだまま。

end . . . .

(後書き)

やっぱりテーマ小説、難しかったです。

しかも、春野先生とちよびつと内容が被ってしまったてしまいました  
(汗)「被ってる、とあたしは思ったのですがどうでしょうね……」  
春野先生の方が先に投稿されていて、読ませていただいて、あっち  
やーとてもかなわないわ、内容変えよう！と決意したのは良いもの  
の、アイデアは浮かばず、過去のテーマ小説も書きたいし、のモロ  
モロで当初の作品を投稿しました。あしからずお許しください。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7596a/>

---

微かに吹く風 ~ひとやすみ編

2008年11月7日08時57分発行